外国語教育研究　Foreign Language Institute

センター通信

2000年度

年　報

金沢大学外国語教育研究センター

目　　次

巻頭言……1
2000年度事業内容……2
　日誌……2
　センター通信　記事タイトル一覧［2000年度分］……3
　研究会報告……4-5
　総合科目……6
　検定試験・検定模擬試験……7
　講演会報告
　　東京大学における英語教育－ビデオ教材を中心にして－…8
　　自信がつく英語発音－カタカナを活用して－……9
　「映画と異文化理解」の報告……10
　CALLによる授業……11
　教材紹介……12
　語学教材［2000年度購入分］……13
スタッフ紹介……14-15
付録：語学教材利用状況……16

巻　頭　言

金沢大学外国語教育研究センターの活動および役割

センター長
三　盃　隆　一

金沢大学外国語教育研究センターが発足して５年が経過した。発足時から最初の４年間の大変な時期、前センター長大瀧敏夫教授を中心に私たちスタッフ一同は、学内共同教育研究施設の一つとして、金沢大学の外国語の教育と研究の両面において貢献するべく、様々な努力をしてきた。

少し具体的に説明すると、教育面では教養的科目の言語の授業を担当すると同時に、大学院までを視野におさめ、継続して言語の学習を希望する学生のために何ができるか、将来計画構想委員会を設けて検討し、その結果は中間報告として『年報』等で公表してきた。CALL実習室でのパソコンを使った授業や自習環境も整えつつある。外国語教育研究センターのほぼ全員のスタッフが参加する総合科目「異文化理解とコミュニケーション」も年々充実してきた。「映画と異文化理解」では、平成12年度は前期と後期の各１週間をシネマ・ウィークと称し、年間10本の映画を上映した。さらに、今年は年間５回のCollege　TOEICをはじめ各種語学検定試験と模擬試験の世話や実施、他にこれまでどおり各種語学テープの貸出し等も行ない、好評を得ている。

研究面では、大学の言語教育についての講演会を今年は２回、授業方法についての研究会も４回開催している。各自の研究会での発表や授業実践や研究論文を掲載した紀要『言語文化論叢』は今年で５号発行したことになるが、外国人教師を含めわずか14名のスタッフで毎年300頁を越す紀要を発行し続けてきたことに対しては、それなりの自負がある。しかしながら、周知のごとく、大学を取り巻く状況は年々厳しさを増しつつあり、それは金沢大学における言語教育においても例外ではない。

時あたかも「金沢大学の課題と取り組み－自己改革を目指して－」に基づき、全学委員会で様々な重要議題が審議されつつある。外国語教育研究センターとしても、学部が重視する卒業時や就職時や大学院進学時の学生の語学力に繋がる「４年（６年）一貫教育」や、さらには大学院までも視野におさめ、金沢大学の言語教育のために何ができるかについて、これまで以上に、真剣な議論と実践を積み重ねていきたいと考えている。

2000年度事業内容

日　誌

２０００年

４月１３日	総合科目開始
５月１３日	カレッジ　ＴＯＥＩＣ
２９日	フランス語検定模擬試験　５級
３０日	フランス語検定模擬試験　４級
６月　２日	フランス語検定模擬試験　３級
１４日	映画と異文化理解①　「女と男の危機」
１６日	映画と異文化理解②　「八月の狂詩曲」
１９日	映画と異文化理解③　「ウェディング・バンケット」
２０日	映画と異文化理解④　「麦秋」
２１日	映画と異文化理解⑤　「ジョイ・ラック・クラブ」
２４日	カレッジ　ＴＯＥＩＣ
８月　１日	研究会「リスニングとライティングを重視した英語Ｂの授業」
１０月　３日	講演会　「東京大学における英語教育」－ビデオ教材を中心にして－
１４日	カレッジ　ＴＯＥＩＣ
１１月１３日	フランス語検定模擬試験　３級
１５日	フランス語検定模擬試験　５級
１６日	フランス語検定模擬試験　４級
２９日	映画と異文化理解⑥　「赤ひげ」
３０日	映画と異文化理解⑦　「変臉」
１２月　６日	映画と異文化理解⑧　「ガン・ホー」
７日	映画と異文化理解⑨　「猫が行方不明」
８日	映画と異文化理解⑩　「日の名残り」
１２月　９日	カレッジ　ＴＯＥＩＣ

２００１年

１月２３日	研究会「学生に主体性をもたせる授業」
２月　６日	研究会「ネイティブ教員と組んだフランス語のペア授業の試み」
１５日	講演会「自信がつく英語発音－カタカナを活用して－」
１６日	カレッジ　ＴＯＥＩＣ
２０日	研究会「ＣＡＬＬの技法と実践」
３月　末日	『言語文化論叢』第５号発行
３月　末日	『センター通信年報(2000年度)』発行

センター通信　記事タイトル一覧［2000年度分］

No. 41(2000/04/18)
College TOEICのお知らせ

No. 42(2000/04/27)
フランス語検定(5、4、3級)模擬試験のお知らせ
いっしょにハンガリー語を勉強しませんか

No. 43(2000/05/26)
ドイツ語合宿Wochenende-Seminarのお知らせ
語学教材貸し出しについてのお知らせ

No. 44(2000/05/31)
「映画と異文化理解」―シネマ・ウィーク―のお知らせ

No. 45(2000/06/05)
College TOEICのお知らせ

No. 46(2000/09/13)
College TOEICのお知らせ

No. 47(2000/09/19)
講演会のお知らせ　「東京大学における英語教育――ビデオ教材を中心にして――」
佐藤良明教授(東京大学)

No. 48(2000/09/28)
フランス語検定(5、4、3級)模擬試験のお知らせ

No. 49(2000/11/17)
College TOEICのお知らせ

No. 50(2000/11/22)
「映画と異文化理解」―シネマ・ウィーク―のお知らせ(前半)

No. 51(2000/11/29)
「映画と異文化理解」―シネマ・ウィーク― のお知らせ(後半)

No. 52(2001/01/16)
研究会のお知らせ

No. 53(2001/01/29)
College TOEICのお知らせ

No. 54(2001/02/05)
講演会のお知らせ　「自信がつく英語発音――カタカナを活用して――」
島岡丘教授(茨城キリスト教大学)

研究会報告

リスニングとライティングを重視した英語Bの授業

川　畑　松　晴（金沢学院大学）

授業では「学び方」を学ばせたいと考えている。それも、試験のための英語ではなく、communicationの道具としての英語の「学び方」である。従来、和訳を介さずに意味をとる「直読直解」の読み方を中心としてきたが、昨年度からリスニングとエッセイライティングも加えている。

テキストはNHKのBSニュースを教材化した『Japan This Week 2』(金星堂)。題材は毎週独立した、日本に関係したものであり、日本人が英語で話す場面が必ず含まれている。宇宙飛行士向井千秋さんへのインタヴューなど、発音は「ネイティヴ」に程遠く、活字にすれば文法的誤りが散見される。が、学生には、「これこそ'国際英語'の中の'日本英語'である。仕事ができて、内容がよければこの英語で十分なのだ」と話している。

授業は、前の週に提出された100～150語のエッセイの内容紹介と典型的な用法の誤りを指摘することから始まる。エッセイは内容を中心にコメントを付けて返す。次はビデオで５分程度の場面を２回視聴。各々内容理解チェックの簡単な問いに答える。更にスクリプトを見ながらカセットテープで２回聴く。これには句単位の穴埋め問題が付いている。最後に４題の英作文(ヒントとなる単語付き)を黒板で仕上げ、Discussion Questionsとして示されているトピックス３題を簡単に説明して授業は終了。学生はこの中の一つを選んでエッセイを書く。

このために、教授用資料の英文"Sample Answers"(700語程度)のコピーが毎回手渡される。学生には「借文」を許しむしろ奨励しているが、意外に独自の「和製英語」で書く学生が多い。書きたい事を自由に自分の英語で書く意欲を育てながら、「正確な英作文力の習得」とのバランスをどうとらせるかが教師としての私の課題である。高校時代の「和文英訳」でしかも１～２行しか書いたことのない学生には、150語の「自由英作文」は大きな負担であろうが、大部分の学生は毎週なんとか提出している。

この授業は、たとえ文法的誤りは多くても、自分の思いを沢山綴ることを目標としている。そして、発音に関しても、「ネイティヴ並み」など意に介さず、高校までに習得した「日本人訛り」で結構だから、聴くに値する話が出来るようになってほしいものと願っている。'Fluency turns into accuracy.(量から質への転換)'も期待しながら。言語習得理論からして、決して逆ではないのである。

学生に主体性を持たせる授業

高　瀬　孝　子（金沢学院短期大学）

1997年度設立間もない医学部保健学科の「英語B」を担当することになった際、将来卒業生ほとんど全員が従事する医療関係の仕事をささえる患者との友好な人間関係をつくりあげるために役立つ授業ができないか考えてみた。

まず教科書選定にあたって、多方面にわたる内容が患者との話題づくりに役立つのではないかとの観点から*Why? How? Who?*(北星堂)を選んだ。これはアメリカの新聞社に子供が寄せた疑問に答えた記事三十数編を収録したものである。学生は各自自分の興味にそった一編を選ぶことができるように思われた。

授業のやり方としては、自分の選んだ編をする授業ではその学生が教壇に立って教師役をやり、一般の学生にあてて訳読をさせるという形をとった。またその記事内容に関連することを調べて報告することも教師役の学生にさせた。

授業を円滑に進めていくために、一週前までに教師役をする学生に担当部分の日本語訳を提出させ検討するようにした。また教師役の学生が一般学生をあてる際に公平かつ平均的になるように名列票にあてた学生名をチェックさせた。

教師役の学生が自分の担当の授業に欠席すると予定通り進まなくなり困った事態になるが、急な発熱による欠席が一名あっただけで概ね予定通り進みまずまずの結果であった。その欠席学生は自分で別の英字新聞の記事を選んできたので、その記事のコピーを全員に配布し埋め合わせの授業をしてもらった。

学期末試験は平常の授業でおろそかであった感のある発音に的を絞り、一人ずつ教科書中の好みの一編を選び朗読するという形の試験を行った。

以上、他の人に働きかけ何かをさせるということを学生が経験ができた点では将来の仕事に役立つ授業であったのではないかと思われる。

ネイティブ教員と組んだフランス語ペア授業の試み

三　上　純　子
ベアトリス・ルロワイエ

2月6日の研究会で、今年度、フランス語A(初級)で行ったペア授業の実践報告をさせていただいた。このような実験クラスを設けた理由は、第一に、本学の未習言語の履修システムでは文法と講読／会話の授業内容に関連性がないため、学習効率があまりよくないこと、第二に、日本語による学生との意志疎通が難しいネイティブのクラス運営を日本人教員が支援する必要性を感じたことである。

授業は同一の学生を対象に、三上が文法を担当し(火曜、3限)、ルロワイエが会話を担当した(木曜、3限)が、学習内容は毎週連絡しあった。『ディアローグ』(大阪日仏センター編、第三書房)を会話の教科書とし、文法では、教科書準拠の別冊問題集を使った。試験も、三上が文法を中心とした筆記試験、ルロワイエが発音、言行為の聞き取りと口頭試験という形で分担した。

前期の授業は、連携もうまくゆき、学生の満足度も大変高かった。ただ、後期になると、学生の学力差が大きくなったこともあり、会話の教科書は難しすぎて使えなくなってしまった。大まかには、文法の授業で学んだ事項を基礎にした聞き取り、口頭表現の練習が、会話の授業で行われてはいたが、内容的な連携は弱くなった。学生の方も、前期ほどには、ペア授業の効果を感じられなかったようである。

日、仏の教員に共通する評価としては、以下の点が挙げられる。1)よく勉強した学生の到達度は高かった。2)互いの授業内容を知っていると、次の授業の準備がしやすい。学生にとって難しいところも相互補完的に強化できた。3)ネイティブのクラスで孤立しがちな、習熟度が低い学生に対しても適切な注意を与えることができた。

今回は十分なペア授業ではなかったが、担当者にとっては実り多い体験だった。いずれまた、本学の学生により適した教材を用いて総合的な授業に挑戦してみたい。研究会でいただいた貴重なご意見に御礼申し上げる。

CALLの技法と実践

西　嶋　愉　一

CALL(コンピュータ支援外国語教育)は、ことばとしては定着してきたものの、実際にCALLを活用した授業に取り組もうとする先生方はまだまだ少ないのが実情である。

CALLを活用して授業を行うというのは、市販の自習用に作られたCD-ROMをただ自学自習させればよいというものではないし、逆に、コンピュータを利用するにしても、音声や映像を一方的に流すだけの授業を行うのであれば、AV機器を利用したのと大きな違いはない。授業として実施するには、教師が全体のシナリオをコントロールしつつ、学習者が主体的に教材に取り組めるような組み立てが必要である。

そうした授業を組み立てるには、教師自身もCALLに関してのスキルや経験を持たなければならない。まずプレゼンテーションツールを使って黒板の代替をする、デジタル化した音声を使って、テキストと連動させつつテープレコーダの代替をする、といった段階を踏むことによって、授業の効果を上げつつ教師自身がスキルと経験を積むことができる。

取り上げる教材も問題である。市販の教材の場合、自習用に作られたものが大半であり、通常のテキストの教科書を使用した場合よりも、授業で利用する場合の自由度は低くなってしまう。むしろ、授業のデザインの中で必要な教材は、自分で作成した方が結果的には簡単で効果が高い。Dynamic HTMLを利用すれば、音声や動画を取り込んだ対話的な教材を、従来の手法より簡単に作成することができ、そのままインターネットあるいはイントラネット上で活用することができる。

研究会では、そうした観点から、発表者自身の経験を軸に、CALLでの授業を組み立てる際に考えるべきこと、自分で作成できる教材の事例、インターネットを活用した英語授業の事例などについて報告した。

コンピュータの活用は、教室におけるAV機器の代替やインターネット閲覧にとどまるものではない。そうした方向性の例として、携帯電話を利用して積極的に情報をプッシュする手法や、コンピュータ本来の計算能力を活用したCALL教材についても紹介した。これらについては、発表者自身も研究の途上にあるので、機会を改めて、より実用的な形で報告したいと考えている。

総合科目

異文化理解とコミュニケーション

三　上　純　子

今年度も、センターの教官を中心として、総合科目「異文化理解とコミュニケーション」を開講した。授業の目的、成績評価の方法は昨年度と同様である。タイトルに見られるように、内容的にはかなり緩やかなくくりの授業なので、個々の講義は、文化圏による言語、生活習慣、宗教の違いから来るコミュニケーションの問題、差別意識、移民労働者の問題など、多様なテーマを扱うものとなった。今年度は、文学部の大瀧教官、留学生センターのルチラ教官に参加していただいたほか、第5回の「異文化とビジネス」では、IBMの首藤薫氏をゲストスピーカーに迎え、ビジネス最前線の異文化摩擦の体験を聞かせていただいた。

第１回　ガイダンス　全教官
第２回　異文化コミュニケーションとは何か
　－ドイツの文化を中心に－
　大瀧敏夫　文学部
第３回　ここが変だよ〇〇人
　大瀧敏夫　〃
第４回　異文化コミュニケーションの具体例
　－イギリスでの経験を中心に－
　大藪加奈　外国語教育研究センター
第５回　異文化とのビジネス
　西嶋愉一　〃
　首藤　薫　IBM
第６回　フランス社会の異文化問題
　三上純子　外国語教育研究センター
第７回　アメリカ社会の異文化問題
　－文学作品を中心に－
　三盃隆一　〃
第８回　パターン化した思考を刺激する
　數見由紀子　〃
第９回　中国社会の異文化問題
　林　香奈　〃
第10回　日本の中の異文化摩擦
　－中国人の場合－
　浅野純一　〃
第11回　中国人と面子
　矢淵孝良　〃
第12回　待遇表現と異文化コミュニケーション
　ルチラ・パリハワダナ　留学生センター
第13回　総合討論　全教官

さて、今回は、最終回の授業の後で、受講者に対し、この授業全体についてのアンケートを行った。以下にその結果の一端を紹介して、今年度の反省としたい。

まず、授業全体の内容理解について、60%以上の内容が理解できている受講者が全体の８割にのぼり、80%以上の受講者は2割程度であった。また、授業全体の内容に興味が持てたかどうかを、パーセンテージで表してもらったところ、８割以上の受講者が60%以上、４割以上の受講者が80%以上の答えを記入していた。これで見る限り、現在の授業内容は、概ね、学生の関心に応えており、ほぼ理解可能な範囲にあると言えるだろう。

扱っている国もテーマも多様な授業形態については、現在のままでよいとする声が圧倒的だったが、扱う文化圏をさらに広げて行くことや、一つのテーマや文化圏を掘り下げることへの要望もかなり高かった。それは、「テーマがしぼられておらず、講師が毎回変わるので退屈しなくてよかった」、「講師が多すぎる。一人の講師について、少なくとも二回くらいの授業があった方がよい」という相反する感想が示されたこととも関わっている。

この授業の受講者の７割が１年生である現状を踏まえると、広く浅く異文化問題を概観するという現在のスタイルにもそれなりの意義はある。ただし、「話題をしぼり、少人数のディスカッション形式でやってみたかった」と述べているような意欲的な学生層に対しては、個々の文化圏、テーマについてより掘り下げた授業が将来何らかの形で提供できればよいと、個人的には思う。他に、「外部の人を講師に招いてほしい」、「外国人の先生や留学生の話が聞きたい」という声もあった。これらの意見を参考に、今後センター内で総合科目の充実のための議論を深めて行ければと考えている。

とはいえ、扱う地域の拡大の問題も含め、センターの教官だけでは限界がある。今後とも学内外のご協力を仰ぎつつ、質の向上に努めたい。

検定試験・検定模擬試験

カレッジTOEIC

平成13年度は前期２回、後期３回の試験を実施した。昨年度と同様、試験日を土曜日にすることで、授業日程との支障もなく計画的に実施することができた。結果については、表に簡単にまとめたので、以下は報告と今後の課題である。

受験者数については、担当の授業の学生から募った開始初年度の頃を考えると、隔世(?)の感があるといってよい。外国語教育研究センターが発足する前は、学生会館の小さな研修室を使って細々と、大学生協がゲリラ的に実施していたTOEICだが、大学の組織に担当する部局ができて、継続的な広報活動ができたため受験生を発掘できたせいであろう。

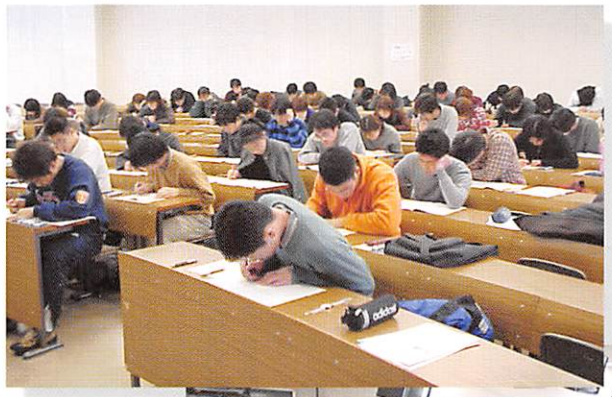
大学での語学教育は単にクラスルーム内での活動に限定されるものではない。最近の経済情勢や労働環境の変化で、企業が雇用の際に即戦力的な能力を求めている。学生はそれを敏感に感じているのか、語学検定試験への関心が新入生の段階から高い。各種検定試験の大学内実施主体としての外国語教育研究センターの責任は重くなるであろう。

大学の組織運営としては依然として学部中心であり、また語学教育は教養教育の一環として認識されている。しかしながら、英語については全学生に対して、学部学年や教科目の垣根を越えて、学習の動機付けを継続的に与えねばならない。その意味で、各種の語学検定試験の計画と実施は今後強化しなければならないと考える。

そのため、来年度以降は米国留学者希望者の啓蒙と発掘のために、TOEFLの学内試験を日程に組み入れる方向で計画しようと思う。金沢大学では外国で学ぶことを視野に入れて外国語を学ぶものはまだ少ない。海外への協定校との交換留学の制度も有効に利用されているとは言い難い。TOEFL試験の広報活動を通じて、より高い目標を意識させることも教育の一貫である。

	受験者	最高	最低	平均
5/13(土)：	30	895	335	511
6/24(土)：	33	840	260	552
10/14(土)：	50	945	290	499
12/9(土)：	73	850	235	526
2/16(金)：	72	885	200	488

(澤田茂保記)



フランス語検定模擬試験

本年度も、実用フランス語技能検定試験の日程に沿って、前期は５月29、30日、６月２日に、後期は11月13、15、16日に模擬試験を実施した。参加者は、３級14名、４級９名、５級20名だった。参加者の多くは、仏検受験を念頭においた授業の受講者である。

検定試験自体も、昨年同様50名ほどの学生が受験している。成績については、本学からの受験者の７割をしめる、４級、５級は、ほぼ全員が合格しているようである。試験を受けるために、自分で積極的に取り組んだ結果だと思われる。３級以上になると、語彙や聞き取りの力をつけるために、かなり個人的に勉強する必要がでてくる。教材の貸し出し以外に、中、上級の学習者をどのようにサポートして行くかというのは、今後の課題である。

来年度も、授業を通じての広報活動に力を入れ、初級段階から、自発的に学べる学生の発掘育成を進めたい。

(三上純子記)

講演会報告

東京大学における英語教育 —ビデオ教材を中心にして—

佐　藤　良　明　（東京大学大学院総合文化研究科）

後期が始まってまもない10月３日、東京大学の佐藤良明教授をお招きし、東大教養学部における英語の統一授業についてお話をうかがった。学生を含む40名ほどの参加があった。

『The Universe of English』といえば、英語教育に関心のある人はもちろん、一般的にもよく知られた東大の統一教科書である。この教科書が実はポップカルチャーで言うところの「サンプリング」の手法で作られている、というところからお話は始まった。さまざまな分野から題材を抽出することにより、教官の専門を離れて、学生が興味をもてる内容の教科書を目指したとのことである。統一授業は１クラス120名で行われる大規模なものであるが、教材作成の段階のこうした配慮をはじめ、きめこまかな工夫が随所でなされている。教科書は基本的には予習用で、授業では教科書と内容を関連させたビデオが活用されている。実際のビデオを見せていただいたが、これも学生のリスニング力に合わせて自主制作されたものであるという。授業は教科書の内容理解の確認とビデオによるリスニングの演習とからなり、学生の作業を中心に進められている。

佐藤先生によれば、こうした大規模統一授業が実現した背景には、それ以前から教官のあいだで新しい英語の授業の形を探る動きがあったことに加え、マルチメディア教育実践のための大型予算がついたことがあるという。これを機に本格的なスタジオが整備され、教室に大型モニターやAV機器が設置されたことで、教材ビデオ制作と授業実施の環境が整ったのである。

教養学部では現在、統一授業である「英語I」と並行して、15名、25名、40名の定員が設けられた少人数授業の「英語II」が行われている。「英語II」は、LS（Listening and Speaking）、W（Writing）、R1（多読・速読）、R2（専門を加味した精読）の４つの中から選択できる形式になっているが、特にLSの人気が高いという。１年次に「英語I」と「英語II」が各１コマ（90分）、２年次に「英語I」１コマが必修となっており、このほかに自由選択科目で英語を学ぶこともできる。「英語I」と「英語II」という対照的な２つの授業が計画された段階では、どちらかと言えば少人数の「英語II」の方に重点が置かれていたそうであるが、現在は「英語I」に対する学生の評価は高く、実力試験によりリスニング力の伸びも示されている。

１時間ほどの講演の後、さらに１時間近く活発な質疑応答があった。その際に、２学年で7000名を超える学生を対象とする試験の実施体制、「英語I」のために設けられた質問室やEnglish Discussion RoomのTAによる運営などについてもお話をうかがうことができた。

学生からは、統一授業でも教官による教え方の違いが大きいという反応があるそうで、授業はやはりパーソナルなコミュニケーションなのだ、という佐藤先生の言葉が印象に残った。　（敷見由紀子記）

自信がつく英語発音 —カタカナを活用して—

島　岡　　丘（茨城キリスト教大学文学部）

人はいままで自分が知らない何かを学んだときに喜びを感じる。それと同時に、既に知っていることが新たな視点から再構成されたときにも面白みを感じるものだ。島岡先生の講演は、後者の意味で、多くの人にとって英語の音の仕組みを再認識する契機となったのではないだろうか。

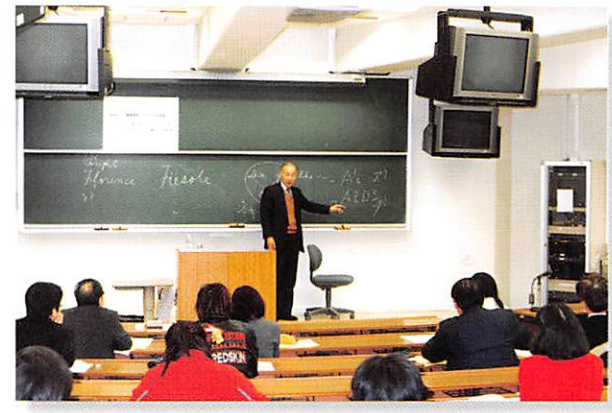
日本の英語教育の分野で、音声教育の指導的な役割を果たされてきた島岡先生が、長年の研究活動の成果をもとに「カタカナ英語音表記」というちょっと変わった（というより従来の英語教育観では邪道(?)の域に入る）指導法を雑談を交えながら楽しく語られた。講演中に取り上げられた事象は多岐に渡って、個々の事例の紹介は不可能なので、詳しくは島岡先生が最近立て続けに出版されている御著書に譲り、ここでは報告者の目からみた講演の内容を要約したい。

ロマンス語系の言語の母音体系は日本語とよく似ているので、そのままカタカナで読めばほぼ通じる。花の都Firenzeもイタリア語では"フィレンツェ"とカタカナ読みすればいい。これがイタリア語を身近に感じさせてくれる。

ところが英語では、日本語の音体系に存在しない子音連鎖に加えて、音と綴り字のギャップが激しく、それが英語嫌いを生んでいるように思える。こうしたことが、英語学習の入り口の敷居を高くしていて、初学者が自信をなくす原因になっている。「自分が既に知っていること」から入っていけないのである。

前任校であるクラスを担当したときに、多くの学生が英語が得意ではなく英語の音声を教えることは容易ではなかった。それで、"ティケッ リーズィ"と板書して、これを読んでごらん、というと、みんなすごく上手に英語らしく発音することができた。これだ！と思ったそうである。カタカナ表記の研究の始まりである。

カタカナ音声表記は自分の知っている知識を利用して学習を開始できるという点で自信を与えてくれる。もちろん、英語の音をただカタカナにしてもダメで、カタカナに様々な表記上の工夫を加える。例えば、



appleを"アップル"と書くのではなく、"エアプル"と表記するのである。"エア"は[a]の短音をカタカナ発音表記で書いたものだが、音声学的には理にかなっている。このような表記の工夫を英語の音体系に網羅的に施すことによって、カタカナを利用した英語発音が可能となり、またカタカナであるが故に日本人には自信を持って発音ができるのではないか。

島岡先生も昔はカタカナ表記を英語の発音指導に使うことには反対であったという。しかし、現在の英語教育では、英語が得意であろうとなかろうと、全ての人が英語の音を学び、自信を持って発音することができるようにしなければならない。そのために日本人であれば誰でも知っている日本語のカタカナ表記を工夫して、それを利用した指導法によって、自信を与えることができるというわけである。

学習というのものが、新しく学ぶことを既に知っていること（既知の知識）に関連付ける過程であるならば、日本人が英語音声を学ぶ際に、カタカナという既知の知識の利用は音の学習の敷居を下げてくれるものと思う。カタカナ表記の工夫で英語の発音に自信がもてる、というユニークな発想は、表記の読み方の規則を教えるという誤った道に入れば、発音記号と同類になってしまう危険性がある。見た目の直感性と表記としての体系性という矛盾した要請を解決しようとするカタカナ発音表記の今後の展開に是非期待したい。

（澤田茂保記）

「映画と異文化理解」の報告

「シネマ・ウィーク」で異文化体験

三　盃　隆　一

外国語教育研究センターがその事業の一つとして「映画と異文化理解」を取り上げるようになって４年がたつ。昨年までの３年間は、英米映画と日本映画を年間約５本、基本的に英語字幕付きで鑑賞してきた。英語字幕付きという形態で英米映画や日本映画を鑑賞することにした理由の一つは、それぞれの映画が、日本人学生と留学生にとって、「外国語学習」の有効な手段になりうるかもしれないとの淡い期待にある。しかし、レンタル店で日本語字幕版のみならず日本語吹き替え版も手軽に借りれる昨今、必ずしも英語字幕版にこだわる必要はないのではないか、それよりもむしろ、すこしでも多くの学生に、映画の鑑賞を通して「異文化理解」を深めるきっかけを提供すべきではないかとの議論は、私たちセンターの教官の中にもあった。その議論を踏まえ、今年の「映画と異文化理解」は以下に記すようないくつかの新方針を打ち出している。

（１）英米映画と日本映画以外に中国映画やフランス映画等も上映する。

（２）英語字幕付き映画にこだわらず日本語字幕付き映画も積極的に上映する。

（３）シネマ・ウィークと銘打ち、前期と後期に各々約１週間連続して上映する。

（４）Ａ１を中心とする同一の大教室に出来るかぎり会場を固定して上映する。

（５）本格的にポスターを作成する等出来るかぎり宣伝に努めたうえで上映する。

前期に取り上げた映画の上映日、タイトル等は以下の通りである。

１．６月14日（水）：『女と男の危機』（*La Crise*）［フランス映画、日本語字幕］

２．６月16日（金）：『八月の狂詩曲』（*Rhapsody in August*）［日本映画、英語字幕］

３．６月19日（月）：『ウェディング・バンケット』（*The Wedding Banquet*）［台湾・アメリカ合作映画、日本語字幕］

４．６月20日（火）：『麦秋』（*Early Summer*）［日本映画、英語字幕］

５．６月21日（水）：『ジョイ・ラック・クラブ（*The Joy Luck Club*）［アメリカ映画、日本語字幕］

後期に取り上げた映画の上映日、タイトル等は以下の通りである。

1.11月29日（水）：『赤ひげ』（*Red Beard*）［日本映画、英語字幕］

2.11月30日（木）：『変臉』（ビエンリエン）［香港・中国合作映画、日本語字幕］

3.12月６日（水）：『ガン・ホー』（*Gung Ho*）［アメリカ映画、日本語字幕］

4.12月７日（木）：『猫が行方不明』（*Chacun Cherche Son Chat*）［フランス映画、日本語字幕］

5.12月８日（金）：『日の名残り』（*The Remains of the Day*）［イギリス映画、日本語字幕］

夫婦、親子、友人、恋人、師弟、主従等の日常関係に潜む異文化コミュニケーションの問題を、ある時はコメディ仕立てで、ある時はシリアスに、またある時はさりげなく淡々と描くという具合に、当然のことながら、個々の監督とその映画によって描く角度や色彩は違うが、世に傑作と言われる映画の人間描写はさすがに鋭く感動的で、観客は時に笑い時に涙しながら、どっぷりと異文化体験し家路につくことになる。映画の醍醐味はここにある。今後も工夫を凝らしながらこの企画を更に充実したものにしていきたい。

CALLによる授業

ドイツ語

金沢大学のドイツ語初級教育は文法中心のクラスA１,A３とコミュニケーション中心のクラスA２,A４に分けられている。ドイツ語系で取り決めているのでそれを無視するわけには行かない。私がCALL教育を利用したのはA１,A３のクラス、つまり文法中心のクラスである(殆どが単位未修了者)。私は文法クラスといえどもコミュニケーション習得を無視しての授業は意味がないと考えている。したがって私の文法クラスは両者を組み合わせての授業となる。CALLに使用した教科書は『パソコンで学ぶドイツ語ハロー、ヴィー、ゲーツ？』である。教科書は課毎に、初めにテーマに合う場面のいくつかの会話が設定され、次に文法事項の説明と文法練習から成り立つ、極ありふれた構成である。授業にはCALL実習室と通常の教室の2室を使用した。授業の１回目は先ず通常の教室で会話の説明(完全な訳は控える)と発音(MDを使用)を練習し、簡単に文法事項を説明する。その後CALL実習室に移動して(初回は西嶋さんの指導を受けて)各自練習問題に取り組む。時間の余るものは、会話テクストに戻り、暗記したり、発音練習したり自由に任せる。第２回目は通常の教室で前回ならった会話のダイジェスト版を用意し、ペア活動でコミュニケーションしてもらう。それまでが一課のサイクルで、終わり次第次の課へ進み，１回目と同じ仕方を繰り返す。

この授業のCALLの役割は、学生自身が文法項目の重点を見つけ出し、動詞の変化や文の構成などを確実にマスターすることにある。CALLの練習もそのようにできている。しかし私の授業全体の目的からすれば、これはあくまでコミュニケーション活動の補助手段にすぎない。２、３回に１回はどれほど文法を覚えているか、そしてそれがコミュニケーションに使えるかを知るために、文法を問う問題と聞き取りや会話文を作ってもらう小テスト(15分)を行った。学期に１回、ドイツ語による口述試験を１人ずつ行った。単位未修了者でもかなりの対話ができるようになったと思う。(文学部　大瀧敏夫記)

中国語

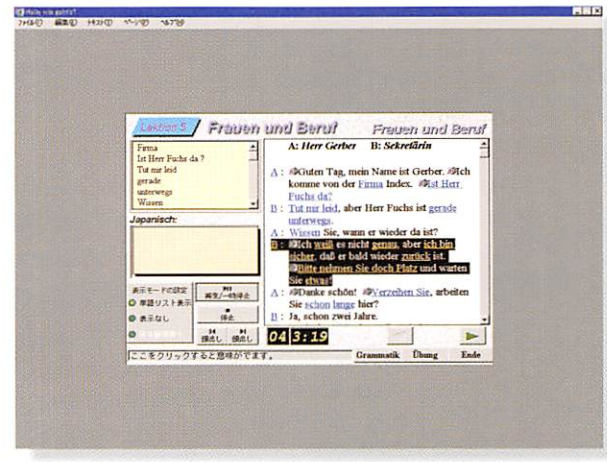
本年度は、実験的に中国語B(中級)でCALL教室を使った授業を行った。受講生は８名。

中国語の場合、WEB上で中国語と日本語を共存させることはほぼ不可能なので、自前の教材を作ることは非常に難しい。中国語学習のホームページの多くは、中国語部分をテキストではなく画像処理しているのが実情である。

そこで、本授業では既製のCD-ROM教材を使用した。使用した教材は、林要三『漢語課本』(東方書店)である。この教材は、中国の中華書局が中国語教育用に編集した同名のテキストをそのままCD-ROMに移行し、音声や日本語訳を付したものである。初級から中級までかなり大部のもの(CD４枚)なので、第20課から始めた。

まず、学期末のレポート課題を決める。授業は、１コマに１課分の本文だけをノルマとし、学生は各自音声を聞きながら本文を読解していく。本センターのCALL教室はLLの機能も備えていて、教師はそれを教壇からモニターできるので、個々の学生の進度に応じて、１対１であらかじめ準備しておいた質問を用いて会話練習をする。本文と会話を終えた学生は順次インターネット上で、中国語のホームページを閲覧し、学期末のレポートの準備をする。この際ピンイン入力も練習する。

学生のレベルに応じて、自習と個別指導が行えるという点は優れているが、クラスが大きくなるとどうしても個別指導がおろそかになるという欠点が予想される。(浅野純一記)



教材紹介

英　　語

■ALC NetAcademy 初級・中級者のためのTOEICテストスコアアップコース

ALC NetAcademy(以下NetAcademy)は、コンピュータネットワークの上で学習する、新しいスタイルの外国語教材です。センターでは「初級・中級者のためのTOEICテストスコアアップコース」を導入していて、学内のネットワークに接続されているWindows 95/98/2000/Meの動作するコンピュータであれば、どこからでも学習することができます(注)。角間にはCALL教育実験室という、コンピュータを使って外国語を学ぶための施設があり、ここでは各種の外国語教材を使用して学習できますが、そのために遠く離れた角間まで来るのは遠すぎる、という方は是非NetAcademyを活用してください。

「初級・中級者のためのTOEICテストスコアアップコース」は、TOEICスコア300～600点程度を対象にした教材で、リスニング力強化コース・リーディング力強化コース・TOEICテスト演習コース・TOEICテストパート演習コース・中間テスト/修了テストの５つのコースに分かれています。特にリスニング力強化コースでは、音声のスピードを30%ダウンから50%アップまで４段階に変更でき、効果的な学習ができます。

この教材は、テレビゲームのように何かを突破すれば先に進める、先に進みつづければゴールに到達するという性格のものではありません。いわば「学習するための素材」です。

たとえば先に触れたリスニングのスピードにしても、自分がスピードに弱いのか、それとも語彙が足りないために聞き取れないのか、ということを考えながら使わないと、スピードを落としてもちっとも聞き取れない、リスニング能力が上がらないということになりかねません。スピードに弱いのならスピードを上げたものを聞いてから通常のスピードに戻す、語彙や文法が弱いのならそれぞれのテキストを併用して勉強してからリスニングに戻るなど、教材を通して自分の良いところ、弱いところを把握した上で、良いところをのばす、弱いところは集中的に学習して苦手意識をなくすように工夫すれば、学習の効果が上がってくるはずです。

なお、NetAcademyを利用する際には登録が必要になります。詳しくはセンターのホームページをご覧になるか、e-mailでn-acad@fli.ge.kanazawa-u.ac.jpまでお問い合わせください。

(注)リスニングの部分を学習するにはスピーカまたはヘッドホンが必要です。また、それ以外にもいくつか条件がありますので、詳しくは上記メールアドレスまでお問い合わせください。

フランス語

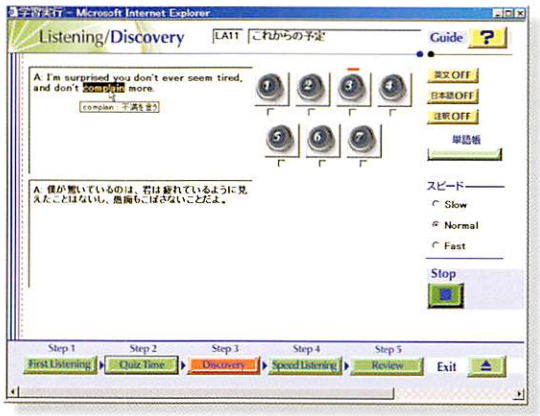
■J'apprends à lire avec Tibili (CD-ROM)

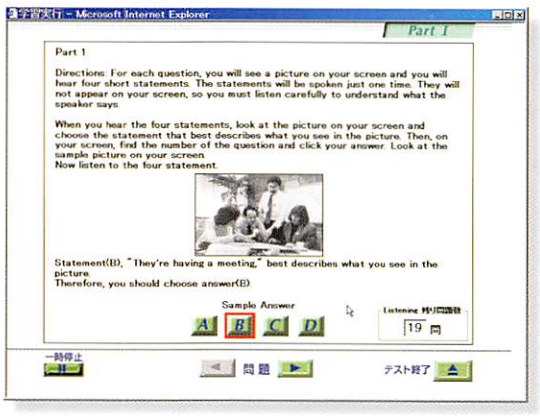
学校嫌いの少年 Tibili と共に読み書きを学ぶ学習ソフト。フランス語圏の子供向けの教材ですが、初級文法を終了していれば利用可能です。全体はアニメーション仕立てで、学習者が、物語の登場人物の指示に従って謎解きをしながら進みます。各ステップで、単語探し、手紙を読む、返事を書くといった練習が織り込まれています。謎解きのヒントを聞き取るのはやや難しいかもしれませんが、絵を見ながら、繰り返し聞けば理解できるでしょう。聞き取りの教材としても楽しめます。

中国語

一人歩きの中国語自由自在(JTB出版事業局)(CD-ROM)

旅行会社の編集らしく、北京上海七日間の旅をシュミレートした教材。入国から観光、食事、簡単なビジネス会話、トラブルなど一通り必要な中国語の2300文例を練習できる。各セクションには質問があり、50点以上取らないと次に進めない。高得点のご褒美ビデオ画面は、観光スポットの予習にもなります。初級会話を一通りやった人が、中国旅行の前に復習を兼ねてこのCD-ROMを学習するのが、一番効果的と思います。





語学教材[2000年度購入分](CD)はコンパクトディスク付き、(カセット)はカセット付き

英　語

・英検全問題集2000年度版(CD)
　　1級、準1級、2級
・ALC Net Academy 初・中級者のためのTOEIC
　　スコアアップコーススタディブック
・TOEICテストスーパートレーニング
　　必須英単語4000、基礎文法編、リーディング編、
　　リスニング編、文法・語法・正誤問題編
・TOEIC公式ガイド＆問題集
・TOEFL Test問題と徹底対策ー
　　完全対応「コンピュータ受験」決定版(CD)
・TOEFL英単語3800
・はじめてのTOEFLー
　　必ず出題される基礎文法集中攻略
・TOEFL Test620点ー
　　実戦型文法完全制覇マニュアル
・TOEFL　テストパーフェクトライティング
・TOEFL　テストパーフェクトリスニング
・TOEFL　テストパーフェクトリーディング
・TOEFL　テスト連続・速聴大特訓　応用編
・TOEFL　TEST 完全攻略3000語(CD)
・The Japan Times
　　はじめての人のTOEFL TEST
・TOEFL　テスト公式問題で学ぶ英文法
・Nonstop English wave (CD)
・The Universe of English
・The Universe of English Ⅱ(CD)
・The Expanding Universe of English
・The Expanding Universe of English Ⅱ(CD)
・The Parallel Universe of English
・英語のタスク活動と文法指導
・より良い英語授業を目指して
・コミュニカティブな英語授業のデザイン
・ALTのためのニッポン生活Q＆A
・児童外国語教育ハンドブック
・ティーム・ティーチング成功の秘訣
・新しい英語教育への指針
・英語教育改善へのフィロソフィー
・言語テストの基礎知識
・英語授業成功への実践
・外国語の効果的な学び方
・ライティングのための英文法
・効果的な英語論文を書く
・オーラル・コミュニケーション・ハンドブック
・和英翻訳ハンドブック
・英語の音声を科学する
・英語のキャッチコピーの面白さ
・日英ことわざの比較文化
・実践　言語テスト作成法
・実践カルチュラル・スタディース
・ウェブスター大辞典物語
・これを英語で言いたかった
・もっとこれを英語で言いたかった
・どうしてもこれを英語で言いたかった
・英文法が楽しくわかる

ドイツ語

・独検99年度全問題集　春・秋号
・独検99年聞き取り試験
　　1級・2級・3級・4級(カセット)
・ベルリンの壁

フランス語

・仏検問題集　1999年(CD)
　　1級・準1級、3級・4級・5級
・仏検2級対応　出る順仏検単語集 dictées用(CD)
・完全予想仏検3級(改訂版)
・フランス語を話そう！フランスを知ろう
・現代フランスを知るための36章
・フランス語の書き取り、聞き取り練習入門準備編

中国語

・中検問題集　2000年度版(CD)
　　2級・1級、準2級・3級・4級、準4級
・どうちがう？中国語類義語のニュアンス2
・中国語の学び方

朝鮮語

・ハングル能力検定試験問題集　1999年度秋季(CD)
　　1級・2級、準2級・3級、4級、5級
・韓国語能力試験 問題と解答 5･6級(CD)
・韓国語能力試験 問題と解答 1･2級 3･4級(CD)

ロシア語

・ロシアの妖怪たち

その他

・花の名物語
・ピーター流外国語習得術
・外国語の水曜日　学習法としての言語学入門
・ヨーロッパのカフェ文化
・モノの都市論

スタッフ紹介

英　語

大　藪　加　奈（おおやぶ　かな）助教授
専門分野：英米文学
ひとこと：異文化のなかの英語コミュニケーション、英語文学に興味があります。

數　見　由紀子（かずみ　ゆきこ）助教授
専門分野：言語学(主に英語や日本語を対象とした音韻論および意味論)
ひとこと：言葉の研究を通して、人間の認知の様式や思考のしくみなどについて探っていきたいと考えています。

澤　田　茂　保（さわだ　しげやす）助教授
専門分野：英語学・言語学
ひとこと：語学の学習はお金がかかるものだ。それは本質的に外国語学習は相手がいるからである。だからいろいろな意味でお金がかかる。また、基本的に実技であるのに、実技のための外国語学習の施設が貧困であるのは悲しい。体育施設に投じている予算規模を外国語教育に振り向けるべきだ。

三　盃　隆　一（さんばい　りゅういち）教授
専門分野：1．英米文学　　2．文学理論　　3．異文化間コミュニケーション
ひとこと：1と2の中でも、「悲劇文学」や「悲劇論」に特に関心があります。3に関しては、外国語教育研究センターの総合科目のテーマでもありますし、「多民族多文化共生」や「文学の文化研究」は時代の流れでもありますので勉強中です。

Judith　Kendall（ジュディス・ケンダル）外国人教師
専門分野：TEFL、演劇研究
ひとこと：Sometimes, especially in the rainy season, Kanazawa reminds me a little of England, and Cambridge, where I grew up.　I enjoy teaching here, especially the challenge of getting students to speak in English to me.

西　嶋　愉　一（にしじま　ゆいち）助教授
専門分野：自然言語処理
ひとこと：CALL教育を主に担当します。言語とコンピュータ、かたちは違いますが、どちらも人間の生み出したコミュニケーションの道具です。道具というものは使いこなさなければおもしろさが半減します。学生のみなさんがこの二つの道具を(できれば両方！)使いこなせるようにお手伝いしたいと思います。

ドイツ語

菊　池　悦　朗（きくち　えつろう）教授
専門分野：スイスのドイツ語の語彙。都市交通環境の日独(語圏)比較。
ひとこと：交通環境の分野で私の好きな言葉を日独両語で一つずつあげて「ひとこと」としたい。
○供給が需要を生み出す。
○Wer Strassen saet, erntet den Stau.

フランス語

三　上　純　子　（みかみ　じゅんこ）　教授
専門分野：18世紀フランス文学
ひとこと：外国語を学ぶことは、さまざまな意味で人生における出会いの可能性を広げると思います。フランス語が、学生の皆さんの人生をより豊かにしてくれる窓の一つとなるよう願っています。

Béatrice Leroyer　（ベアトリス・ルロワイエ）　外国人教師
専門分野：美術史、フランス語教育
ひとこと：私は金沢で生活する機会が得られたことを二重の意味で喜んでいます。第一に、ここでは日本文化の伝統的な面と現代的な面とを見ることができるから、第二に、大学でフランス語を教えるという、私にとって新しい経験ができるからです。またこの機会に日本語をもっと勉強したいと思っています。

ロシア語

橋　本　弘　樹　（はしもと　ひろき）　助教授
専門分野：ロシア語学
ひとこと：ロシア語の文法を教えることを通して学生とのコミュニケーションを考えています。文法と格闘している学生のために、何か有意義なことができればよいと思っています。

中国語

浅　野　純　一　（あさの　じゅんいち）　助教授
専門分野：中国近現代文学
ひとこと：中国語を通して、東アジアの人々の気持ちを少しでも理解して欲しいと思っています。とはいえ、とりあえずは発音など基礎の練習です。

矢　淵　孝　良　（やぶち　たかよし）　教授
専門分野：中国古典文学
ひとこと：外国語教育に熱心なスタッフと一緒の職場は楽しく、新鮮な刺激を受けて若返った（ような気がする）。

林　　香　奈　（はやし　かな）　助教授
専門分野：中国文学
ひとこと：中国の古典文学、特に魏晋南北朝時代の文学に興味を持って勉強しています。

李　　慶　（Li Qing,　り　けい）　外国人教師
専門分野：中国古典文学・文献学
ひとこと：中国古典文献学、とくに明清時代の思想と文学を研究しています。この分野には未開拓の領域が多く、来日以来の何年間も日本における中国古典文化研究史を書きつづけていますが、なかなか終わりそうにありません。でも頑張りたいと思います。

付録：語学教材利用状況（貸し出し用）

言語別	教材の種類	センター所有の教材数	利用者数（人）
英　　語	TOEIC教材	61	115
	TOEFL教材	32	36
	国連英検教材	4	1
	英語検定問題集	17	20
	検定対策教材	38	9
	その他教材	134	118
ドイツ語	検定問題集	11	1
	検定対策教材	6	0
	その他教材	4	8
フランス語	検定問題集	23	11
	検定対策教材	14	17
	その他教材	65	29
中国語	検定問題集	26	4
	検定対策教材	2	1
	その他教材	5	2
韓国語	検定問題集	14	14
	その他教材	3	2
その他の言語	ロシア語	6	1
	スペイン語	3	0
	イタリア語	4	0
	アラビア語	1	0
	ペルシャ語	1	0
	トルコ語	1	0
	アイルランド語	1	0
	ギリシア語	1	0
	ハンガリー語	1	0
	スワヒリ語	1	0
	タイ語	1	1
計		480	390

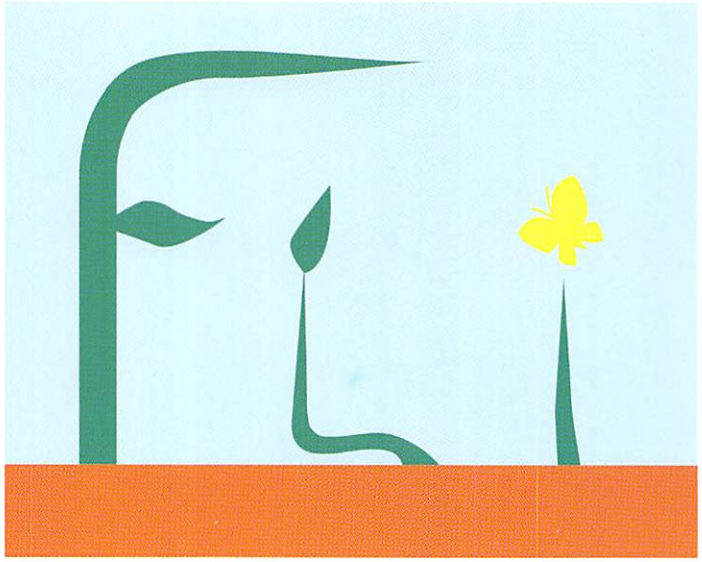
（2000年4月~2001年2月）

外国語教育研究センター通信　２０００年度年報

２００１年３月発行

金沢大学外国語教育研究センター　広報委員会編

920-1192 金沢市角間町

電話:076-264-5760　fax:264-5933

flijimu@sgkit.ge.kanazawa-u.ac.jp